



家族の絆（自分の場合）

三野 州豊

6月に入り、コロナ感染拡大がここ中央チカラン地域にも忍びより、チカラン日本人学校もせっかく全校での対面授業が続いていたのに、残念ですが今はオンライン授業です。コロナの終息を願うばかりです。そんな中、子どもたちはご家庭でどのように過ごしていますか。

家庭状況はそれぞれ異なりますが、特に本邦から、家族総出で来尼されたご家庭の場合、異国での生活の変化に戸惑いも多くありましょう。家族間の「時間」の持ち方に限って言えば、こんなことはありませんか。

- ・日本の頃よりもお父さんは早く帰ってくる！？
- ・日本の頃よりお母さんは自分の時間が増えた！？
- ・子どもとの時間が増えた！



違っていましたらごめんなさい

私事ですみません。若かりし頃仕事の都合で、下は1歳の幼児から上は多感な小学生を連れ、妻には仕事を辞めてもらい、家族で渡航したことがあります。何もわからない異国の地で家族には心細い思いをさせてしまいました。妻は常に子どもの安全と健康に気遣い、上の子は友達との別れに悲しみ、次の子は「いつ帰るの？」と寂しそう。家族皆それぞれにストレスを抱え、故郷の親にも心配をかけました。いろいろと迷惑をかけましたが、半年ほどを過ぎたあたりででしょうか、なんだかんだとって、皆が異国で生活していく上で「同じベクトル」に向いていることにふと気がつきました。皆さんの場合はいかがでしょうか。

夫婦の会話、子どもとの会話、家族揃って行動する時間が生まれました。日本の頃より家庭が「生活の核」になっていました。この国の文化の中に住まわせてもらっている。日本人コミュニティの中でも家族単位で交流させてもらっている。そんなことを意識するようになりました。もし家族がそれぞれ勝手気ままに過ごすと思えさせられません。家族が互いに協力しなければ、日本人社会にも貢献できませんし、天災や政治的有事等の危機管理にも対応できません。幸い、問題に対して家族で話し合う時間はあったのだと思います。

確かに異国での生活は様々なストレスにさらされます。でもそのプレッシャーは共に生活を全うする目的となるのです。つまり異国での生活は「家族の絆」がより深まるチャンスなのです。日本にはないリスクが多くあっても、その分海外生活はチャンスも多いのですね。

CJS の子どもたちはみな素直です。その根幹は家庭のおかげだと思います。家庭において「大切にされている」「必要とされている」要するに「愛されている」という実感は幼年期でも思春期でも大切な要素ですね。

かつてある中学生がいる家庭で、数年間を現地で過ごし、帰国の頃にはすっかり表情が穏やかになって染めていた髪も黒く戻っていった家庭がありました。もちろんこの国のことではなく、しかも昔の話です。

